

はじめに

人は好き嫌いがある。人間は強みと弱みがある。

人間社会には勝ち組と負け組が存在する。

勝ち組 VS 負け組なんて、単純に割り切ることそれ自体に意味がないのかもしれない。

いつの時代も人間社会は厄介である。

幕末から明治維新时期の歴史的な出来事と当時の歴史上の赤裸々な人物像に触れる。そこには政治的な勢力争いが垣間見ることができる。但し、登場人物の多くを語ることは難しく、土佐藩の山内容堂に焦点を当てることとする。

その理由は、

私の高祖父下村銚太郎盛俊(私の祖父が中村に養子縁組)は土佐藩15代藩主山内豊信、隠居後の名容堂公とは主従関係にあり、年齢も近い。土佐藩の「御侍中先祖書系図牒」(上級・中級武士の経歴を記した年譜書で数度にわたり集められ、明治時代まで書き継がれたもの。)に記載された盛俊の経歴を参考にしたい。

山内容堂は文政10(1827)年10月～明治6(1872)年6月 44歳8か月

下村盛俊は文政13(1830)年7月～明治10(1877)年12月6日 47歳5か月

容堂が盛俊より3歳年上の同世代で、激動の時代を生き、病死により40歳半ばで一生を終える。

盛俊の経歴は、

・文久3(1863)年 大目付となるが、元治元(1864)年、当分の大目付役を免職される。

・慶応3(1867)年 大目付・切支丹改役・軍備御用・外輪物頭に復職する。

・明治元(1868)年 山内容堂の側用人、役職は京都の外交役、新政府の貢士となる。

・明治2(1869)年 参政公儀人、三条実美の側用人、中老となる。

〈 以上は御侍中先祖書系図牒に記載、下記は他の書物等より 〉

・明治4(1871)年 明治新政府の工部省の鉄道助に就任する。

・明治5(1872)年 日本初の新橋-横浜間の鉄道が開通、明治天皇を乗せたお召し列車に同乗する。

・明治7(1874)年 鉄道助を退官する。

第1章 江戸幕府の終わり

1、井伊直弼 VS 徳川斉昭・四賢侯

安政5年に井伊大老は、幕府の政策に反対する大名、幕臣、公家、志士らを一弾圧する安政の大獄が起こる。

事の発端は、

①ペリー来航により生じた条約調印問題

②徳川13代将軍の継嗣問題

「幕府の最高権力者井伊直弼」と「天下のご意見番徳川斉昭と幕末の四賢侯」の対立である。

(1) 条約調印問題＝開国問題の対立

①井伊直弼は嘉永6(1853)年のペリー来航を機に日米和親条約を締結し、さらに安政5(1858)年に安政五か国条約を米・英・仏・露・蘭と結んで貿易を開始した。こうして鎖国は終わりを遂げる。

②これに対立したのが、攘夷派の水戸藩第9代藩主・徳川斉昭である。その斉昭に同調したのが、薩摩藩主島津斉彬、越前福井藩主松平慶永(春嶽)、土佐藩主山内豊信(容堂)、宇和島藩主伊達宗城ら幕末の四賢侯であった。

(2) 将軍継嗣問題の対立

①紀州藩主徳川慶福(後の14代将軍徳川家茂)を推す井伊直弼と譜代大名の南紀派。

②一橋慶喜(後の15代将軍徳川慶喜)を推す実父徳川斉昭と四賢侯の一橋派。

(3) 安政の大獄の断行

①徳川斉昭やその子の一橋慶喜、幕末四賢侯・公卿に隠居・謹慎となる。

②水戸藩家老の安島帯刀は切腹、水戸藩奥右筆頭取茅根伊予之介(元藩校の弘道館長)、越前藩士橋本左内(元藩校明道館学監)、儒者頼三樹三郎(歴史家頼山陽の子)、長州藩松下村塾主宰吉田松陰(元藩校明倫館塾頭)ら将来を期待された若き人材が命を落とした。大名、幕臣、公家、志士ら100名近くが処罰された。

(4) 桜田門外の変

水戸・薩摩十八士が、万延元(1860)年、桜田門外の変で大老井伊直弼を暗殺した。

2、山内容堂・吉田東洋 VS 武市瑞山

(1) 容堂と東洋

①容堂は、小説もドラマも、あまりよく描かれない。その不人気な理由は尊王攘夷派の武市瑞山を死に追いやったことが大きいだろう。明治維新は封建制度を崩壊させた身分の低い志士たちがヒーローである。そのヒーローの武市を活躍出来る大舞台に立たせる前に切腹させたのだから無理もない。確かに封建制度の主従関係は不公平であった。容堂は、その構図からは人気者にはなりにくい立場であった。しかしながら、あまたの藩の殿様がいる中で、「四賢侯」と呼ばれたのだから、勿論優れた藩主であったに違いない。では、容堂は土佐の藩主として何をしたのだろうか。

- ②容堂は嘉永元(1848)年に土佐藩第15代藩主山内豊信となり、1853年のペリー来航の危機感から幕政の改革を主張し、藩政の改革にも取り組む。外圧に屈する開国を拒み、海防強化を主張する吉田東洋に藩政の改革を託す。
- ③東洋は1853年、参政(仕置役)に抜擢されるが、1855年に不祥事を起こし、参政を罷免される。容堂は阿諛・虚飾を嫌ったと言う。不祥事にも厳しかった。東洋と同じように下村盛俊も大目付を罷免され、4年近い謹慎処分を受けた。つけ加えると容堂は藩主に就任後、猛勉強と心身の鍛錬に努めた大変な努力家であった。さて、謹慎の身になった東洋は後藤象二郎、板垣退助、福岡孝弟、岩崎弥太郎らが門下生となる少林塾(鶴田塾)を開講し、若手の人材の育成に尽力する。
- ④1857年、東洋は参政に復帰する。復帰後は、将来藩の重役を担う後藤、板垣、福岡ら若手を登用し、身分階級制の簡約化・人材登用・海防配備・殖産興業等の政策を実施する。また、米国から帰国したジョン(中浜)万次郎から米国事情の聴取や下士の岩崎弥太郎を海外貿易の調査の為に長崎へ派遣するなど、身分を問わず多様な人材を活用した。東洋のそうした取り組みは容堂の意に沿うものであり、信任も厚かった。
- ⑤桜田門外の変で事態は一変、尊皇攘夷論の武市瑞山が土佐勤王党を結成し、1862年に東洋を暗殺する。東洋、46歳の人生であった。東洋亡き後、攘夷論者の側用役小南が力を持ち、武市が藩政に参画する。

(2) 容堂による土佐勤王党の弾圧

- ①武市は京都留守居役に就くが、長州藩尊攘派と公卿が京都を追われる八月十八日の政変を機に、容堂による土佐勤王党の弾圧が強まり、慶応元(1865)年切腹を命じられる。35歳の短き人生であった。
- ②土佐藩には固有の上士・下士の身分制度があり、武市瑞山・坂本龍馬・中岡慎太郎ら多くの下士が脱落した。容堂は、下士嫌いで知られる。東洋は多様な人材登用をしたが、尊皇攘夷論の瑞山とは相容れない関係であった。
- ③“武市の強硬な手段による東洋暗殺”と“容堂による武市の切腹処分”は、それぞれの言い分はあるだろうが、土佐藩にとっては、貴重な人材を失う不幸な出来事であり、誠に残念至極である。

(3) 「士(志)気」に富む人材の登用

- ①容堂は土佐への帰還が許されなかった謹慎中だけでなく、江戸の生活が長かった。そうした機会を使い、水戸学の大家藤田東湖や海防論の羽倉簡堂をはじめ文人・画家・歌舞伎役者・力士まで幅広い人物との交流を深めた。
- ②松平春嶽とは息の合う関係であり、島津斉彬を信頼し、多くを学んだ。容堂は斉彬の武士階級の低下した「士気」の振興に影響を受け、若い士気に富む人材の発掘・登用に熱心であった。元治元(1864)年には門閥家の山内主馬、深尾弘人、五島内蔵助の職を解き、東洋が育てた若手を抜擢する藩人事の刷新をした。その後の後藤・福岡・板垣らの重役登用へと繋がっていった。

3、幕府 VS 討幕派

(1) 徳川慶喜 VS 島津久光

- ①慶応2(1866)年15代将軍となった徳川慶喜は、島津久光・松平春嶽・山内容堂・伊達宗城と意見が対立した。
- ②とりわけ慶喜と久光とは激しい主導権争いを繰り広げた。

(2) 薩長同盟

- ①薩摩藩は薩英戦争で外国の強さを実感し倒幕に傾いていた。そんな折、坂本龍馬と中岡慎太郎が、薩摩藩から長州藩に軍艦や武器を、長州藩から薩摩藩に米を提供する和解案を持ち込み、西郷隆盛・小松帯刀と木戸孝允の間で慶応2年薩長同盟が締結され、犬猿の仲の関係が修復された。
- ②その後第二次長州討伐が決行されるが、薩長同盟の甲斐があり、軍事力に勝る長州藩が幕府軍に大勝する。

(3) 島津久光 VS 山内容堂の対立

- ①慶応3(1867)年5月、四侯会議における久光の反幕府的な動きに嫌気がさした容堂は、体調不良もあり、その後は欠席を続ける。
- ②島津斉彬に対する尊敬の念や高い信頼を抱いていた容堂だが、久光とは馬が合わなかった。

(4) 薩土密約と薩土盟約

- ①四侯会議の不発を受け、中岡慎太郎が仲介に動き、土佐藩にあつて倒幕派の板垣退助と谷干城が主導し、薩摩藩の小松帯刀・西郷隆盛・吉井友実との間に倒幕に関する薩土密約を慶応3年5月21日に結ぶ。容堂は翌日報告を受ける事後承認であったが納得し、板垣に兵制改革を命じた。
- ②ややこしいことに同年6月22日、今度は坂本龍馬の仲介により、後藤象二郎が主導となり寺村道成・真辺正心・福岡孝弟と西郷隆盛・大久保利通・小松帯刀とで大政奉還による公儀政体の為の薩土盟約を結ぶ。
- ③薩土密約と薩土盟約を薩土同盟と言う。薩摩藩は、“相手変われど、主変わらず”という二股の状態で臨んだ。

(5) 大政奉還から戊辰戦争

- ①倒幕から討幕へと変化する運動に対抗し、公武合体を望んだ後藤象二郎は竜馬から知恵を得た大政奉還を藩内はもとより薩摩藩等他藩の有力者にも了解を取り付け、その後山内容堂へ進言した。大政奉還建白書は徳川慶喜に提出され、慶応3年10月慶喜は朝廷に大政奉還を申し出た。この日を夢見ていた坂本龍馬と中岡慎太郎は1か月後に暗殺される。坂本31歳、中岡29歳、またしても若い有能な人材を失う。
- ②大政奉還は実現したものの、後藤の取り纏めは公武合体論と討幕論が混在する中での玉虫色の合意であった。薩摩藩は慶喜が大政奉還を拒否すれば、倒幕の口実が出来るとの思惑もあり、了承した。ひとり反対した土佐藩の板垣

- も、渋々合意した。他方で、慶喜の方も大政奉還への不満や怒りの声上がることを予想しながらの断行であった。
- ③やはり、すんなりとは行かず、慶喜の「心を同じくしてともに協力して、皇国を保護すれば、海外の万国と並び立つことができるはずだ。」の発言に徳川の影響を排除したい思いの西郷と大久保は敏感に反応した。薩摩・土佐・尾張・越前・安芸が協力して、明治天皇の名で「王政復古の大号令」を発し、徳川幕府の時代は終わりを告げる。
- ④まだ話は終わらず、明治元年(1868)正月3日、新政府が、変わらない旧幕府勢力の権力保持に反発を抱き、武力を持って旧幕府勢力を倒す「鳥羽・伏見の戦い」、そして「戊辰戦争」へと向かうが、新政府軍が勝利を収めた。

第2章 明治新政府の始まり

1、薩長土肥の藩閥政治

(1)近代化国家への歩み

- ①歴史の立役者は大政奉還・王政復古・戊辰戦争を経て、四侯会議の藩主から薩長土肥の藩士へと移行していく。藩士・浪士らが藩主を乗り越えて朝廷を動かし、政局の主導権を握ることになる。
- ②明治新政府は、薩長土肥が実権を握る藩閥政治の形態のもと、「維新の三傑」と言われる木戸孝允・西郷隆盛・大久保利通が、明治4(1871)年7月幕藩体制に終止符を打ち、廃藩置県を断行し近代的な国家づくりに着手した。

(2)肥前・長州 VS 薩摩

- ①近代化のシンボルとして鉄道敷設を訴えたのは、肥前藩出身大隈重信と長州藩出身伊藤博文の開明派官僚である。他方反対派は薩摩出身の大久保と西郷である。
- ②反対の理由は、お金も技術もないとの指摘で大久保は軍の強化優先を主張した。
- ③紆余曲折を経て、明治4年に工部省内に鉄道寮が設置され、後藤象二郎が初代工部大輔に就任した。工部省は体制が整備され、官営事業の鉄道・造船・鉱山・製鉄・電信・灯台など近代国家のインフラ整備を進める。

2、鉄道開通まで

(1)土佐藩の勢力

- ①後藤工部大輔の元に、土木司の頭に陸援隊出身の岡本健三郎が就き、本省の文書局の責任者に下村盛俊、次席に海援隊出身の長岡健吉、会計局の責任者は吉井正澄と土佐藩出身者が占めた。他方、長州五傑のメンバーの山尾庸三は初代工学頭に、井上勝は鉱山頭兼鉄道頭に就任した。
- ②しかしながら、後藤の体制は長く続かず、在職3か月で左院副議長に転出し、後任には伊藤博文が就任した。
- ③そんな中ではあったが、下村が明治5年に鉄道寮鉄道助に、吉井が工部大丞に昇格するが、土佐藩出身は官僚組織において勢力を拡大出来なかった。それは洋行経験者や技術官僚の人材不足が原因と考えられる。

(2)洋行経験者と技術官僚

- ①明治時代の閣僚経験者をみると、薩摩藩14名、長州藩14名、土佐藩9名、佐賀藩5名と薩長出身者が群抜いている。官僚においても、同様なことが言えるが、違いは幕臣出身者の数と質である。
- ②明治4(1871)年11月から1年10か月に亘り、岩倉具視を全権大使とし、副士の木戸孝允、大久保利通、伊藤博文、山口尚芳、それに随行員、留学生を含めた総勢107名が欧米諸国を視察した。驚きは津田塾創立者の津田梅子が6歳で参加したことである。
- ③海外視察は、既に幕末にも実施されていた。密航の長州五傑の伊藤博文・井上馨・井上勝・遠藤謹助・山尾庸三、幕府の使節では福沢諭吉、渋沢栄一、西周、勝海舟らが洋行を経験している。洋行経験者は総勢約130名で、その内訳は、幕府57名に対し、薩摩藩26名、長州藩16名、土佐藩・肥前藩各2名である。ここでも薩長42名に対し土肥4名とその差は歴然としている。幕府も多いのが目を引く。鉄道敷設はこれらの洋行経験者や技術官僚、及びお雇い外国人らによって、着実に前に進んでいく。

(3)日本初の新橋－横浜間の鉄道開通

- ①あらゆる障壁を乗り越えて、明治5年9月12日(1872年10月14日)に日本初の鉄道は開通した。おめでたいことに、横浜歴史研究会と同様に今年、日本初の新橋－横浜間の開通から150周年という大きな節目を迎える。
- ②150年前の10月14日、天皇陛下を始め、政府の頭官らが乗車する9両編成の特別列車が、汽笛一声、ゆっくりと動き出した。文明開化のシンボルである鉄道が、日本の「近代化」を一步前に進めた。

第3章 土佐藩の人物像

1、容堂と後藤

(1)山内容堂

容堂にとって吉田東洋は、頼れる腹心的な存在であった。しかしながら、容堂を支えた期間は余りにも短かった。それを受け継いだのが後藤象二郎である。後藤は、容堂の思いを汲み取り、期待に応えるべく行動をする実践派の家来である。浮世絵に例えれば、容堂は版元、東洋は浮世絵師、後藤は彫師であり摺師である。

(2)後藤の功績と人となり

- ①後藤は、「土佐藩の殖産興業・富国強兵」と「江戸時代から明治時代への大政奉還」の2つの偉業を成し遂げた。
- ②その為に、岩崎弥太郎・坂本龍馬・中岡慎太郎ら身分にとらわれず優秀な人材を登用した。
- ③慶応2年に殖産興業・富国強兵を目指す「開成館」を設立し、岩崎を長崎出張所(後の土佐商会)の主任とした。また、坂本と中岡の脱藩を許し、それぞれを海援隊と陸援隊の隊長に任命した。

- ④後藤は坂本から知恵を借り、大政奉還を実現するが、各藩の複雑な思惑や駆け引きが交錯中で根回しに奔走した。その最中にも「いろは丸事件」に続き「イカルス号事件」が起こり、イギリス公使のパークスとの会談など事件解決に取り組んでいた。
- ⑤長所や魅力として豪放磊落な性格、有能な人材を重用出来る懐の深さ、機を見るに敏であること、突破力と行動力、豪快で男気なところが指摘される。一方で、短所として緻密さに欠けることや放漫経営が挙げられる。
- ⑥なにしろ憎めない人物である。そんなところに容堂も惹かれたのではないだろうか。

2、下村盛俊・省助親子

(1) 山内容堂の側用人

- ①盛俊は容堂の傍で仕えた。
- ②容堂は風流人で武芸にも通じ、遊び方も最後の殿様らしい派手さであったと言う。尊王攘夷派や倒幕派を嫌った容堂だが、木戸孝允とは馬が合ったようだ。木戸とは会えば飲み、大いに時勢を談じ、意気投合したそうだ。木戸孝允関係文集に下村盛俊との書簡のやり取りが載っている。

(2) 福岡孝弟の正室

- ①近代名士家系大観によると、福岡孝弟の正室妻・敏子は下村庄左衛門長女と記載されており、盛俊の妹である。
- ②省助は福岡の直属の部下で海軍中隊司令官の要職に就いた。中岡慎太郎陸援隊始末記にもそのような役回りで登場している。

(3) 後藤象二郎の蓬萊社

- ①後藤象二郎は、明治6(1873)年に征韓論争に敗れて板垣退助、西郷隆盛らと共に下野する。その時に、政治資金の調達を目的とした商社「蓬萊社」を設立した。長崎の高島炭鉱の経営に手を出した。三菱鉱業セメント発行の「高島炭礦史」によると吉田茂元総理の父である土佐藩出身の竹内綱が、「工部卿伊藤博文に高島炭抗の払い下げの話を後藤に告げ、払い受け運動に着手した。」と記されている。下村省助は高島炭抗の支配人兼出納長となり、下村盛俊は竹内綱と同様に蓬萊社幹部・主宰代理となった。
- ②蓬萊社は士族や島田組や鴻池組らによって設立された会社であるが、典型的な「士族の商売」であり、経営不振が続いた。お雇い外国人に多額の報酬を支払い、それだけが原因ではないが、期待の高島炭鉱は僅か3年半で経営が行き詰まり、ジャーディン・マイセン商会から莫大な借金をする。その返済に苦しみ、弥太郎に助けを求める。これは、福沢諭吉と大隈重信が弥太郎に高島炭抗の買収話を持ちかけた。渋る弥太郎を二人が説得した経緯がある。兎も角も三菱高島炭鉱に生まれ変わり、採炭量は好調が続き三菱のドル箱になったと言う。
- ③お雇い外国人の月給は目を見張るものがある。

- ・高島炭抗の例(明治14年頃の月給、高島炭鉱史より)
グラバー 705 円・外国人技術者責任者ストダート785円25銭、低い給料でも260円である。
日本人は山脇正勝(三菱出身の責任者)175円・高取 伊好(肥前の炭鉱王の異名)150円、下村省助(蓬萊社のプロパーで、設立時の支配人)125円・事務係 40 円、船乗組 15~25 円・用度係9円である。
- ・鉄道の例(出典:『日本国有鉄道百年史』第1巻 昭和45年 330、334頁より)
建築師長リチャード・ピカース・ボイル 1250 円・建築師長エドモンド・モレル 850 円・建築副役ジョン・イングラント 750 円に対して日本人駅長(判任官) 75~12円 である。
- ・他の書物の記載を参考にして、大雑把ではあるが明治期の給与を参考に記せば、
日本の官僚では、大輔が 400 円、軍人の大尉 100 円、軍曹 25 円、明治19年の小中学校教員の手当含まない初任給が5円だったそうです。

3、後藤象二郎、岩崎弥太郎、福沢諭吉

(1) 慶応義塾の三田評論(福沢諭吉をめぐる人々) 末木孝典先生の後藤象二郎より転載させていただきます。

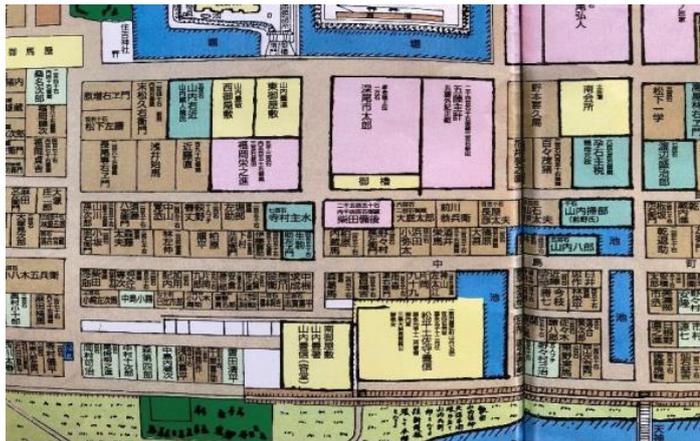
“福澤諭吉が最も親交を深くした政治家は大隈重信と後藤象二郎だったという。大隈との関係はよく知られているが、福澤が後藤を高く評価し、また実際に深く肩入れしたことはあまり知られていない。「前世界の大象」(大町桂月『伯爵後藤象二郎』)と評されるつかみ所のない後藤を、なぜ福澤は評価したのだろうか。「福澤は後藤の大胆磊落な人柄と伝統的習慣に無頓着な不羈自由の思想に魅力を感じたようだ。後藤の秘書を務めた塾員の三宅豹三によれば、”福澤の静粛な家庭とは対照的に後藤の家は常に賑やかだった。しかし福澤は後藤の家に来ると寛ぎ、かえって後藤の方が厳格に座って敬意を表した。” 後藤象二郎の人柄が伝わってくる。

(2) 「三菱グループ」のサイトにある「三菱人物伝」に福沢諭吉と彌太郎の記載を転載させていただきます。

“初期三菱には当然のことながら土佐出身者が多かった。石川七財(しちざい)、川田小一郎らに代表される幕末・維新の激動の中を生き抜いた仲間だ。ところがある時期から、土佐とは直接関係のない学識者が増えて行く。彼らは三菱の経営の近代化に大きな役割を果たす。その背景には実業家岩崎彌太郎と啓蒙思想家福沢諭吉の一目を置き合う関係があった。慶応義塾や東大から多くの人材が採用された。彌太郎は豪語した。「番頭や手代を学識者にするには出来ないが、学識者を番頭や手代にするには出来る」彌太郎らしい言葉である。” 尊重しあうお二人の関係が伝わってきます。

終わりに

本来は結論が求められるところですが、ここでは結論持ち越しでお許し頂きたいと思います。
 江戸から明治への移行は、まさに激動の時代でした。260年続いた江戸時代の武家社会、封建制国家は崩壊し、人々の生活やものの見方は一変しました。「日本の近代化、経済的発展を成し遂げた」ことは素晴らしいと思います。しかしながら、多くの若き優秀な人材を失いました。開国に反対した攘夷派の流れを継ぐ尊王攘夷の討幕派は、時代の流れで攘夷も徐々に変化はしていましたが、明治時代になると、西欧諸国の近代化を学び、それに真似て新しい国づくりをしました。攘夷を主張していた時とは様変わりな行動です。富国強兵・殖産興業の推進には、洋行経験者の元幕臣が貢献しました。ここでは江戸が明治に引き継がれました。
 革命や変革は、いつの世もどこの国でも流血が付きものです。そこまでしないと、悪しき時代や体制と惜別出来なかったのでしょうか？
 もしこうだったらと思っても、過ぎ去った歴史は変えられません。
 しかしながら、歴史に学ぶことは出来る。この言葉を終わりとさせて頂きます。



高知郭中図 幕末(1860年頃)
 下村庄左衛門(盛俊の父) 140石、馬廻格
 乾(板垣)退助 270石、馬廻格
 福岡孝弟 180石、馬廻格
 後藤良輔(象二郎) 150石、馬廻格
 深尾市太郎 1万石、家老職筆頭家老
 山内主馬 6800石、家老職
 福岡栄之進 5300石、家老職
 五藤主計 2400石、家老職
 の記載がある。

表 1-2 鉄道幹線の変遷 (1871~76年)

	明4.11	明治5.9	1873.1	74.10	75.3	76.6	生年	備考
井上 勝							1843年	イギリス留学 (UCL-53-68年)
塚本助郎							1845年	洋行 (59-70年)、72.8 建設課長、77.1-78神戸運輸課長、78-82新橋運輸課長
竹田幸胤								
佐藤政俊							1821年	長崎海軍伝習生、常備隊所帯曹長
佐田信之								72.8-75.4 新橋運輸課長
太田源次							1835年	普通科、英語通訳、文久2年幕府海外使節随員
下村直俊								72.5 大坂在勤
河口 洋								
田尻真隆								
瓜生 實							1842年	幕府英語学校助教、71年大寺勲教授(学術顧問)、74.10-77神戸運輸課長
花原謙造								75.4-77新橋運輸課長
飯田清次郎(俊昭)							1847年	オランダ留学 (オランダ工科大学-67-74年)

備考：1. 『工部省記録 鉄道之部』第一巻(日本国有鉄道)『工部省鉄道関係官制一覽』及び青木清一編『日本鉄道史料叢刊』(鉄道資料、1955年)より採録。
 2. 卒年不明のものには記号を省略し、以下、同じ。
 3. 敬号欄は『工部省記録 鉄道之部』のほか日本交通協会編『鉄道先人傳』(1972年)、村井正利編『干将井上源次小伝』(1915年)、『工部省土佐台田舎』(河原田、1957年)その他を参照。



「日本鉄道業の形成」 中村尚史著より

『横浜海岸鉄道蒸気車図』 三代広重 横浜市中央図書館より

主な参考文献 (敬称略)

- 「酔鯨 山内容堂の軌跡」 家近良樹著(講談社現代新書)
- 「山内容堂」 平尾道雄著(吉川弘文館)
- 「土佐藩」 平尾道雄著(吉川弘文館)
- 「坂本龍馬と明治維新」 アリアス・ジャンセン著、翻訳平尾道雄・浜田亀吉(時事通信出版局)
- 「工部省とその時代」 鈴木淳著(山川出版社)
- 「近代天皇制の展開」 遠山茂樹著編(岩波書店)
- 「日本鉄道業の形成」 中村尚史著 日本経済評論社
- 「高島炭礦史」 三菱鉱業セメント株式会社
- 「明治の技術官僚」 柏原宏紀著(中公新書)
- 「世界を見た幕臣たち」 榎本秋著(洋泉社)
- 「幕末遣外使節物語」 尾佐竹猛著(岩波文庫)
- 「グローバル幕末史」 町田明広著(草想社)
- 「明治維新时期における藩政の展開と国家」 岩村麻里著(明治大学大学院文学研究科大学院文学研究科)